



清新二中だより

本校教育目標

- 1 豊かな心で、互いに敬愛できる人 (敬愛)
- 2 進んで学び、深く考える人 (知性)
- 3 健康で明るく、自ら鍛える人 (健康)
- 4 責任を重んじ、勤労を尊ぶ人 (責任)
- 5 礼儀を重んじ、他とよい関係を築く人 (礼節)



体験する

校長 白石 亨

夏の朝、色鮮やかに咲いた朝顔の花は実に清々しい。

朝咲いて、お昼過ぎには終わってしまう一瞬の花の^{はかな}儚さも、私たち日本人の琴線に触れて好まれているのかも知れない。・・・だがその一方、自分にとっては少々ホロ苦い記憶もある。朝顔に対する小学校1年生のときの思い出である。

当時の子供たちは担任の先生からアサガオの種をもらおうと、赤茶色の素焼きの鉢に蒔いた。今のようにプラスチック製の青色のプランターが無かったからだ。でも、今も昔も、子供たちは毎朝登校すると欠かさずにアサガオに水をまいた。早く発芽して、元気な双葉を出してもらいたいからだ。すぐに多くの子供たちの鉢から芽が出てきた。だが、自分の鉢からはなかなか芽が出ない。随分たっても、なぜだか自分のだけは全く芽が出なかった。淋しいやら悲しいやら…。そのうち腹立たしくも思えてきて、目に涙を浮かべながら担任の先生に苦言した。「大丈夫よ」と言って先生は優しく微笑みだけだった。その言葉のとおり数日後、一斉に発芽した。パッと気持ちが明るくなった。アサガオは無事に大きく育ち、花を付けてくれた。言葉では言い表せないほど嬉しかった。自分に限らず、多くの日本人は朝顔が好きなのだと思う。

それは、誰もが小学生のとき、直接、朝顔に触れて、自分の手で育てた経験があるからではないであろうか。机上の学問として目や耳だけで学んだ知識ではなく、実際に手をかけ、時間をかけ、主体的に学んだ体験があるからこそ、記憶の奥底にこのことが残っていて、何十年経ってもしっかりと朝顔に対する愛着があるように思える。学びの本質はここにあるのだと思っている。

体験を通して学ぶ…。振り返ってみれば、学校は実に様々な体験に満ちている。

例えば昨年度、生徒は技術の授業で金属製キーホルダーを制作していた。金属板を万力にはさみ、ひたすら鉄ヤスリでゴリゴリと削っていた。少しずつ少しずつ、見た目では分からないほどの微量だが、でも確実に削られていく。忍耐強く削っていく。そして時折、その削り具合を自分の指を当てて確かめる。滑らかにきれいに削られているとニコリと笑顔を見せる。とてもいい表情に思えた。そう、自分でやってみるからこそ価値があるのだ。

このことは何も技術の授業に限ったことではない。家庭科の授業では、かわいらしい縫いぐるみづくりが行われ、美術の授業では色鮮やかなスタンドグラスづくりが行われていた。生徒はどの作品にも熱心に取り組んでいた。人は興味・関心を抱いた物を目の前にすると、知的好奇心が湧き立ち、自分の手でやってみたくなるのだ。

ご批判を覚悟の上で申し上げるならば、コロナ禍の中「GIGAスクール構想」等によるインターネットでの遠隔授業の大切さが言われていたが、やはり学びの場は学校だと思う。自分の手でやってみる。五感を通して学んでいく。そして仲間と一緒に肩を並べてその喜びを共有する。それに勝る学びはないと思っている。

さて、7月の声を聞くと夏本番となり、一学期が終了し、いよいよ夏休みを迎える。

コロナ禍が収束しつつある中、久しぶりにお父さんお母さんの田舎に行く人もいるかも知れない。また海や山に出掛ける人も…。勿論、3年生は受験への取り組みが主となるが、生徒諸君にはこの夏ならではの体験にぜひトライしてもらいたい。毎日早起きしてアサガオを愛でる・図書館に通い10冊以上の本を読む・家事を請け負い継続する・自分ならではの調べ学習に取り組む・などなど。何も体験は海や山に行くなどの特別なことばかりではない。日々の生活の中に体験は静かに眠っている。目標を定め、いかに主体的にかかわるかで新たな発見や体験がある。座学の勉強に留まらず、体験に裏打ちされた学びこそ、真の学びだと思っている。